

## チーム医療：緩和ケアチーム

### —関係部署—

部署	スタッフ名
緩和ケアチームリーダー 肺腫瘍内科	森山 あづさ
心療内科・精神科	坂田 幹樹
がん性疼痛看護認定看護師	杉野 幸恵
栄養管理科	山本 理恵子
薬剤科	安井 結香里 若林 里絵 越山 晶弘
緩和薬物療法認定薬剤師	北庄司 敦久
リハビリテーション科	津野 光昭 藤田 将敬 栗山 泰典

### —概要—

緩和ケアチームは、肺腫瘍内科・がん薬物療法専門医の森山医師が身体面の苦痛を、がん性疼痛看護認定看護師の杉野看護師は、入院・外来と切れ目のない緩和ケアを提供できるよう各部署と連携を図っている。2021年度薬剤師の北庄司敦久先生が緩和薬物療法認定薬剤師の資格を取得し、さらに緩和ケアで使用する薬物療法について緩和医療の充実することが期待される。

栄養士は、摂食困難な患者への栄養指導や、摂食を改善する目的の特別なメニューを提供する。理学療法士は患者の回復力を高め、生活の質を維持、向上するのに重要な役割を果たしている。

上記のような多職種のメンバーで週1回水曜日午後15時にカンファレンスを行い、各病棟スタッフとも連携して回診していたが、今年度は医師、看護師ともに減員が続いた。心療内科の坂田医師が急遽退職し、精神科での診療はこころあ診療所の精神科医・横谷昇医師へ引き継ぐこととなった。院内患者を中心に金曜日午前に外来対応して頂いている。

2014年『がん診療連携拠点病院の整備について』で、緩和ケアチームの設置と緩和ケア研修会を実施することが、がん診療連携拠点病院の指定要件とされ、2019年まで院内で研修会を開催してきた。

しかし、2020年コロナウイルス感染拡大に伴い蔓延防止条例が出され、院内研修会は中止となった。また、2021年度も2022年5月26日に院内外多職種の参加予定で準備を進めていたが、直前の3月に病棟にて2度にわたる院内クラスターが発生したため、やむを得ず再度院内研修会を中止とせざるを得なかった。次回研修会を、2023年2月開催目標としている。

医師、看護師の減員に加え、2021年度もコロナ禍は猛威

を振るい救急体制の変化により救急外来業務の追加、コロナワクチン問診、コロナ抗原検査等の感染症センター関連の業務も増え、業務の重複から緩和外来を一時休止した。

緩和ケアチームでのカンファレンス、回診中も業務で呼び出されることも多くなり、回診も度々中断し緩和診療に支障を来す影響が出てきた。今までの形式にとらわれず個々に情報を収集し、可能な範囲で回診し、後で問題点を話し合う形式とした。

### —実績—

2018年『アドバンス・ケア・プランニング(以後、ACP)を含めた意思決定支援を緩和ケアとして提供できる体制を整備すること』が、地域がん診療拠点病院の指定要件に追加された。当院では、がんの治療方針を示すインフォームド・コンセントの場に、担当医とともにがん性疼痛看護認定看護師の杉野看護師が同席し、ACPを含む病状説明を行っている。診察時間だけでは患者・家族が理解しきれなかった事項についての質問や相談に可能な範囲で応じている。

しかし、前述のチームの減員と救急およびコロナ関連の職務の増加のため介入数は昨年に比して減少した。

2021年度緩和チームでの介入症例数はのべ94人。ACP介入件数は92人。緩和ケア外来患者数22人。

緩和ケア外来は来年度月曜日再開を検討中。がん看護外来は月曜日午後、杉野看護師が対応している。

### —今年度の成果と反省点—

病棟では家族面会や外出外泊の制限が続き、院内クラスター発生からはさらに体制が厳しくなり、終末期の患者が家族に面会困難な状態が続いた。

病状が安定している方は緩和病棟のある病院へ転院し、制限はあるものの面会可能な対応をして頂いている。今後当院でも対応に検討が必要な問題と思われる。

### —来年度への抱負—

がん拠点病院として地域連携をすすめ、がんを中心とした緩和医療に携わってゆく。

2021年10月には南アフリカで新たな変異株「オミクロン株」が出現した。今後もコロナ禍での緩和ケアの立場の難しさもあるが、来年度は介入症例数を増やし、個々の患者に対する丁寧な対応を目指してゆく。